武蔵野日曜聖書講筵　聖霊降臨節夕の祈祷会

パウロの改心
――使徒行伝第９章――

１９７６年６月６日
小池辰雄

終わりまで耐え忍ぶ者　ドラマ中のドラマ　霊的な開眼　本因坊丈和の夢　自分を何ものともしない世界　180度の引っくり返し　祈り

【使徒行伝９】

1サウロは主の弟子たちに対して、なお恐喝（おびやかし）と殺害との気を充（みた）し、大祭司にいたりて、2ダマスコにある諸教会への添書（そえぶみ）を請（こ）う。この道の者を見出さば、男女にかかわらず縛りてエルサレムに曳（ひ）かん為なり。3往きてダマスコに近づきたるとき、忽（たちま）ち天より光いでて、彼を環（めぐ）り照らしたれば、4かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。5彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。6起きて町に入れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』7同行の人々、物言うこと能わずして立ちたりしが、声は聞けども誰をも見ざりき。8サウロ地より起きて目をあけたれど何も見えざれば、人その手をひきてダマスコに導きゆきしに、9三日のあいだ見えず、また飲食（のみくい）せざりき。

10さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、幻影（まぼろし）のうちに主いい給う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』11主いい給う『起きて直（すぐ）という街（ちまた）にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈りおるなり。12又アナニアという人の入り来りて、再び見ゆることを得しめんために、手を己がうえに按（お）くを見たり』13アナニヤ答う『主よ、われ多くの人より此の人に就（つ）きて聞きしに、彼がエルサレムにて汝の聖徒に害を加えしこと如何ばかりぞや。14また此処（ここ）にても、凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり』15主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに、我が名を持ちゆく我が選びの器なり。16我かれに我が名のために如何に多くの苦難（くるしみ）を受くるかを示さん』17ここにアナニヤ往きて其の家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主すなわち汝が来る途（みち）にて現れ給いしイエス、われを遣（つかわ）し給えり。なんじが再び見ることを得、かつ聖霊にて満たされん為なり』18直ちに彼の目より鱗（うろこ）のごときも

の落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、[19]かつ食事して力づきたり。

●終わりまで耐え忍ぶ者

「終わりまで耐え忍ぶ者は救われるべし」

といってね、集会も、終わりまで耐え忍ばなくてはいけないんですよね。まぁ、いろんな事情で帰ったかもしれませんけれども。私は、「気の毒だなぁ」と思うんです。

私は自分のことを言ってはおかしいけれども、１９２６年、東大に入りまして３月７日――忘れもしないです、雪が降っていた――その聖日から先生の死に至るまで１回も休みません、私は。どんなことがあっても、出掛けて行った。５年間完全に。

〔註：「翌１９２６年の春、３月７日、雪の降った日曜から、先生の地上を去られる日までの集会のあったすべての日曜と新町学廬〔即ち１９２９年の秋の月、水、金曜の晩に開かれた古典購読の夜学〕は新町で暮した。」（著作集第６巻『随想集』／第二部「偉大な野人」／三、藤井武先生と私／（其二）天職論）〕

ある時は夏、一人で先生を占領して一夏行ったことがある。藤井先生は６月の終わりになると集会を解散する。腐れ縁があってはいかんと。それで９月になるとまた申し込む。私は解散の後もまた夏、先生の所へお訪ねした。先生は喜んで迎えてはくださいました。

とにかく、打ち込んで聴く時は、自分の判断は、ある意味において要らないんです。私は自分に自信ならざる自信がなければ、こんなことは言わない。けれども、もはや概念の世界を超えた、愛という言葉でも被いきれないものが――これは宇宙的なものだね、キリストは宇宙的な方ですから――それに私は、ある意味において、本質的に負いこませられているわけです。

だから、そういう角度から私はものを言っているので、まだ若い方々が何か妙な判断はなさらない方がいいですよ。さきほどの感話を聞いていて、ある感話にちょっと私は残念に思った。それで私は一言、言っておきましたけれども。

私の、キリスト以外の先生はパウロです。このパウロさんは何といっても大変な器です。いわゆる神学でもなければ、いわゆる聖書研究でもない。皆さんは本当にこのパウロの手紙、使徒行伝の事態を――聖書は私がいつも言っている通り、身読（しんどく）する――身（からだ）で読むということは、電車の中でもどこでも直ちにその世界に入れるような読み方をしてください。

今、司会者もある呻きをもって言われましたが、その通りです。このガリラヤ会の諸君は、ちょっと目立たないけれども、本当に筋金が入っている。何といっても、ヨルダン会の諸君の先輩ですから。

●ドラマ中のドラマ

使徒行伝の第9章に入ります。別にいちいち解説するわけではない。今日は祈祷会で、祈りの世界でそれぞれの深みに入っていただきたい。9章、22章、26章に同じようなことを3回パウロが告白しているわけです。まず、この聖書の中に出てくるドラマの中で――私は聖書をドラマといっているが――このパウロの回心くらいドラマ的なものはない。ドラマ中のドラマだね。これは冥想し祈って読まなければ、読めないところです。

パウロというひとは、ユダヤ人中のユダヤ人の血を持っている。

「ベニヤミンの族（やから）、ヘブル人中のヘブル人」

という。また、教養の面からいうと――当時のタルソは地中海沿岸のアレキサンドリア、アテネとタルソは三大文化都市といってもいいような所だ――ギリシア文化を彼はそこで教養をつけている。それから、修養の方からいうと、ユダヤ教――ガマリエルに付きましたから――そしてその中のチャンピオンであった。また、市民としてはローマ市民である。ユダヤとギリシアとローマと三つの要素をこの男は運命的にいただいている特殊な存在です。そして、パリサイ人中のパリサイ人。

「律法（おきて）の義につきては責むべきところなし」

と自らも言っているような、非常に誇りの強い男だよ。パウロの言葉の中に「誇る」という言葉がたくさん出てくる。大体、天才的な人間というのは自信が強い。そういう自信の強いのには、霊震がかかってこないと、どうにもならんというわけです。

今日、私が午前の集会に「天震」と書いたのは、多少そういう角度からの気持があるから、ああいう言葉を使うんですけれども。そういうチャンピオンですよ。どの点からみても、パウロというのは正にエリート中のエリート。断然、頭角を現したんだね。ユダヤ教におきましては非常に確信があって自信満々。だから、

「新興宗教のキリスト、イエスはけしからん。イエスを信ずるやつはなおさらいかん」

と、まぁいうようわけで、片っ端からとっ捕まえて、これを牢屋に運んで、死ぬのをよしとしていた。一種の殺人犯です。

ところが、このナザレのイエスという方は、キリストという方は、これもユダヤ人ですからね、血統からいうと。〔そういうことは〕よく分かっている。

「だけれども、あれは熱心だな、キチガイみたいな熱心だ。あの熱心をいっぺん引っくり返さなければダメだ」

と。パウロは自分を主体、主にして、神に対する熱心なんだ。まぁ、熱心なクリスチャンにはよくこういうのが居るんですよ、

「無教会主義」

とか何とか言ってね。イズムやセクショナリズム、主義根性、宗派根性。パウロがそうい

う方なんだ、そのチャンピオンなんだ。その熱心さは結構だけれども、それは主我的な熱心だ。己を立てる。これをキリストはちゃんとご覧になって、霊界のキリストが、

「これを何とかしよう」

と。「何とかしよう」なんて、これは説き伏せようとしたって、説き伏せられるものではない。キリストは非常手段を使った。

●霊的な開眼

1サウロは主の弟子たちに対して、なお恐喝（おびやかし）と殺害との気を充（みた）し、大祭司にいたりて、2ダマスコにある諸教会への添書（そえぶみ）を請（こ）う。この道の者を見出さば、男女にかかわらず縛りてエルサレムに曳（ひ）かん為なり。3往きてダマスコに近づきたるとき、忽然（たちま）ち天より光いでて、

これは霊光です。太陽の光ではない。霊光がいでて、

彼を環（めぐ）り照らしたれば、4かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。

大変なことです。仏教の世界でも、あるですよ、この霊光が輝き出したりすることが。日蓮の場合にもそうだ。

5彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。

霊界のキリストは、自分を「キリスト」とおっしゃらないで、特に「イエス」とおっしゃった。

6起きて町に入れ、さらば汝なすべき事を告げらるべし』

「なすべき」というのは、「どうしてもしなければならない」ということ。

7同行の人々、物言うこと能わずして立ちたりしが、

誰も霊に撃たれて言えない。

声は聞けども誰をも見ざりき。8サウロ地より起きて目をあけたれど何も見えざれば、

霊的な現象は瞬間にくるです、ピシャッと。けれども、それは非常にはっきりしている。

人その手をひきてダマスコに導きゆきしに、9三日のあいだ見えず、また飲食（のみくい）せざりき。

大変なことだね。もの凄い霊縛にあってしまった。

梅村君の円現塾の先生に、こないだ私が按手したら、痺れてしまった。

「どうにもならん」

と言う。

「今に解いてあげるから待っていなさい」

と。私が聖名によってパッと解いたら、またこれびっくりして、

「なぜそうなんだろう」

と。これは使徒行伝で使徒たちがみんなやっている。あなた方が御霊に感ずれば、どなたでもあなた方を通して神さまはなさる。

10さてダマスコにアナニヤという一人の弟子あり、幻影のうちに主いい給う『アナニヤよ』答う『主よ、我ここに在り』

「我ここに在り」というのは、「はい」というヘブライ語的な言い方です。

11主いい給う『起きて直という街にゆき、ユダの家にてサウロというタルソ人を尋ねよ。視よ、彼は祈りおるなり。12又アナニアという人の入り来りて、再び見ゆることを得しめんために、手を己がうえに按くを見たり』

「そういう幻まで見せられているよ」というんです。

13アナニヤ答う『主よ、われ多くの人より此の人に就きて聞きしに、彼がエルサレムにて汝の聖徒に害を加えしこと如何ばかりぞや。14また此処にても、凡て汝の御名をよぶ者を縛る権を祭司長らより受けおるなり』

「とんでもないやつだが、何をおっしゃるか」というわけだ。

15主いい給う『往け、この人は異邦人・王たち・イスラエルの子孫のまえに、我が名を持ちゆく我が選びの器なり。16我かれに我が名のために如何に多くの苦難を受くるかを示さん』

これは「どうしても聖名のための十字架を負うことになる」、それを示すと。

17ここにアナニヤ往きて其の家にいり、彼の上に手をおきて言う『兄弟サウロよ、主すなわち汝が来る途にて現れ給いしイエス、われを遣し給えり。なんじが再び見ることを得、かつ聖霊にて満たされん為なり』18直ちに彼の目より鱗のごときもの落ちて見ることを得、すなわち起きてバプテスマを受け、19かつ食事して力づきたり。

聖霊の働きが来たわけです。だから、

「目より鱗のごときもの落ちたり」

と。霊的な開眼のことです。皆さんの御承知の通りのことで、なにも私が解説する必要もない。

●本因坊丈和の夢

その前に、ちょっと一つの挿話をお話しておきます。これはまた、さきほどの午前のお話のような類似のお話です。

これは碁の世界の話です。本因坊元丈という碁の名人に弟子入りをした戸谷松之助というのがいる。これは信州の水沼郡の商人の子だそうです。小さい時からやはり碁が好きなんだ。お父さんの商品の仕込み先の本所の富豪の荏原貫禄の肝入りで、この元丈の弟子入

りができるようになった。そして、この松之助は碁の初段が許されたのは15歳の時。非常に上達が早いわけです。二段になるのはちょっと時間がかかったらしいが。この元丈が、

「お前は何になりたいか？」

「せめても三段にはなりたいです」

「そうか、それではひとつ、だいぶ力も出てきたから、長坂猪之介（いのすけ）という碁の名人が出羽奥州にいるから、そこへ行って碁の仕合いをしてこい。あれに勝ったら、三段にしてやる」

と。それで、彼は喜んでしまって、さっそく翌日、この気早な松之助は出羽への旅についた。彼はそう言われたので、大いに意気揚々として、もう戦わぬ先から勝ったような気持で、山河百里を厭わず踏破して行った。そこで、長坂猪之介の所を訪ねて、

「先生の御功名を慕い遥々江戸から訪ねて参った戸谷松之助と申す者、一席ご指南に与りとうございます」

なんて言ったんだな、勿体ぶって。

「おお、これはこれは。ようこそお訪ねくだされた。元丈先生は良い弟子を持たれた。戸谷殿は強い強いともう噂には聞いている。指南などとは奥の沙汰。久しぶりで力の入った手合わせを願いましょう」

と、向こうは低く出たわけだ。そこで、二人は始まった。ところが、この猪之介はなかなか大した腕で、松之助は見事にそこで負けてしまった。松之助は悲観してしまって、こんなはずではなかったと、大いに自分に対する期待を裏切られてしまったものだから、失望落胆してしょぼしょぼ帰った。出奔でもしようかというくらいな、多少捨て鉢の気持にもなりました。だいぶ江戸の方に近づいてきた。歩いているうちに、いつしか日が暮れてきた。ある日のこと夕烏の声にふと我に帰ると、もう陽は西山に春（うすづ）いて、暮色蒼然というわけです。前を見ても後ろを振り返っても、目の届くかぎり人影もなければ家も見えない。非常に心細くなってしまった。これでは何か路を迷ったのではないかというわけです。まぁ仕方がないから行く所まで行けといって、一生懸命でまた歩きだした。行けども行けども、そのうちにとっぷり日が暮れてしまって、彼はお腹がへるやら、足は完全に疲れてしまって、そこに坐りこんでしまった。ふと見ると、人家の明かりが見える。「ああ、あそこに人が居る」と、松之助は夢中になって灯火の方にめがけて突進しました。戸を叩いて、

「行きくれて難義をいたす者でございます。一宿一飯のお情けにあずかりとうございます」

というわけだ。

「それはそれは、お困りでござろう。いぶせき粗家と粗末なものでござるが、お厭（いと）いなくば、お入りください」

と、快くその主人は迎えてくれた。その主人は白髪童顔の老人で、もう70歳にもなろうか

というような――昔は70になると真っ白になるらしいが――年輩の老人である。松之助のために囲炉裏の火をかきたてて粥を炊いてくれました。もの腰をみるとどうやら気品のある人らしい。しかしながら、その老人の他に何もその家に気配がない。粥をいただきながら、ふと部屋の片隅を見ますと、そこに碁盤が見えた。

「ははぁ、この老人は碁をやるな」

と思った。なかなか立派そうな碁盤がそこにあったので、御飯をいただいて、よほどこれほどの道具を持っている老人なら碁の腕前は凄いかもしれないと。

「ご老人、橘中のお楽しみをお持ちのようでございますが」

と。「橘中の楽しみ」というのは碁のことなんです。これは中国の物語の中に、「中国の巴の人」というんですが、橘の木の実を裂いてみたら、そこに二人の白髪の老人が碁を楽しげにやっているという姿がそこにハッと現れたという。そういう故事によって、

「橘中之楽」

というのは碁の楽しみのことをいうんだそうです。

「ほう、お気がつかれたか。たしなむというほどでもなけれども、橘中の滋味だけは解していよう。若人、そなたも囲碁をなさるのかな」

「いささかながら」

と答えた。

「それは重畳である。徒然のおりからじゃ、久方ぶりに一局囲むと致そうか」

「不憫ながら、お相手いたしまする」

といって、始めたわけだ。碁笥を開いてみると、自分の方は白い石だ。白い石は腕前の上の人が使う。これでは、初対面でこの老人に向かって、自分が白い石を使っては申し訳ないといって、もう一つの入れ物を開けたところが、また白い。どっちも白い。黒がない。「変だなぁ、これは」と思った。

「こちらも白い石じゃ」

と。老人の蓋をとるのを見れば、そちらの碁笥も白い石であった。

「えっ、白と白では？」

「白と白では、そなたは碁が打てぬと申されるか」

と言って、老人は白と白でやろうではないかと。それで見分けがつかないようではダメだというわけだ（笑）――面白いことが書いてあったよな――それでとにかく、白と白で始めたわけだ。

「打てぬ限りもございますまいが、ちょっと普通とは違いまするな」

「その言葉の様子では、どうやら、二段くらいは打てるらしいな。さらば四目置かるるがよい」

と（笑）。四目置いたら、これは大変な差なんです。とんでもないことを言う老人だと思った。

元丈の門下でこの戸谷松之助というのは相当の技量があるのだが、それが向こうが四目置いて、やるという。もう三石先に置けば、百千百勝の自信があるようなわけです。ところが、こっちを二段として四石を置かすこの老人はいったい神か魔物か、なんて書いてある。とんでもないひとだと。打つほどに、手数の進むほどに老翁の着手は絶妙であるという。とてもこれはやはり自分の敵ではないと。もう50、60手をやったらもう先が見えた、もう勝負はあったと。それで、老人が言うのに、

「そなたは大敗じゃ」

と。お前は大負けだと（笑）。

「ほんの50、60手しか打ちませんのに」

「この未熟者め、終局まで打たねばわからんと言うのか」

と、今度は厳然として向こうから。そう言ったかと思うと、その老人は見ている前で、その碁盤を引っくり返してしまった。

「あっ！」

と悲鳴をあげた。あたりに散乱するところの白い石。

我と我が悲鳴に驚いて、気がついてみたらば、実はそれは野原でもって眠っていた。その夢であった。そういう夢をみたんです、碁に打ち込んでいましたからね。そして、あたりを見回すと、相変わらず何もない。ところが、自分が今そこで歩きくたびれて――正に行き倒れだね――坐って知らず知らずに眠って、そして幻に見たのがその今言った光景なんです。そうすると、ちょっと見上げると、咲きほこる桜の老大樹の根に自分は居た。そして、その桜の花がハラハラと散っていた。それがあの実は白い石の散ったのと相呼応するというわけだ。桜の花の散るのと、碁石の白いのが散ったのが、その夢と現が一つであるという。なかなか面白いね。雪の降るように散ってくるではないかという。

「さて、これは夢であったか」

と。そこでしかしながら、夢にしてはあまりに不思議な夢なので、彼はその老人の打った跡をたどろうとした。そこらの木の切れっ端を並べて、碁盤のあれを作って、夢の中の自分の石を見てみると、これは全部死に石だった。老人の方は本当に活きている石。それで、なるほど老人が

「お前は大敗だ」

と言ったことがわかったと同時に、今度はその夢でもって、本当のその活石の方をたどったわけです。それで、

「これはしめた。自分はもういっぺんあの長坂猪之介のところに行こう」

と。そこで、江戸に帰るのをやめて、再び出羽の方に向かって行く。そうしたところが、この松之助に今度は猪之介はかなわない。

「どうして、お前はそんなに一晩のうちにえらいことになったか」

と。これは本当のインスピレーションですね。

あのヤコブがヤボクの渡しでもって天使に打ち負かされて、そしてイスラエルの名前をもらったのと同じように、また、パウロがダマスコ途上でキリストに引っくり返されて、そして聖霊を受けて御霊のひとになった。それと同じように、この松之助はその夢を通して天来の霊感を受けて、ひとつの飛躍的なあれに入ったわけです。これが即ち有名な本因坊丈和である。それで元丈のあとを継ぐ――碁の方でいうと――衣鉢を継ぐようなことになったわけです。その他いろいろ話はありますけれども。

●自分を何ものともしない世界

桁が違ったものに、次元の違ったものに打たれるということは、素晴らしいことです。聖霊のバプテスマは正にこの次元の違ったものに打たれる。マリヤの場合も、

「懼るな！」

といって、懼れなき世界に入れられる。これが、私が言っているこの絶対次元の世界です。何も私は難しいことを言っているのではない。求めが或るところで絶する。悲願が本願の角度に変わってくる。本願を受けとるわけです。

何とかして三段になろうと思ったら、三段をなお突破してしまう。三段への悲願は、打ち勝たれることによって、敗北することによって、負けることによって、相手に降参することによって――夢の中の白髪の老人に負けました――

「負けるが勝ち」

というけれども、負けることによって、降参することによって、この世界に飛躍するわけです。これが自分を何ものともしないという世界が、無限無量の内容の世界に入っていく。その内容が、義であろうが、愛であろうが、何であろうがいいですよ。そういう質を、とにかく本当に受けとらなければ――我々の現実において、お互いさま人間はいろんな矛盾構造を持っていたり、相対的なものです。けれども、それを或るひとつの観念でもって段々よくなろうとしたって、たかが知れているんです。ところが、この本ものを受けとるというと――なるほど地上では三日月かもしれない。けれども、その三日月は満月と同じ質を持った三日月であるということ。だから、そこはもはや何ものをもっても替えることのできない世界です。

神さまは私を知っていますよ。私は自分で言いたくないけれども。それはキリストの愛は私の中にしみこんでいますから。愛のことは人に語りたくない。これは本当に皆さん一人びとりがそうでしょう。

「右の手のすることを左の手に知らすな」

とキリストが言われた。そのような実存が自然にこぼれているんです。

そういう、絶対の次元の世界に、負けることによって、この本因坊丈和が長坂猪之介に負け、

かつまた夢の中で天来の不思議な夢でもって、新しい戦法を、碁の打ち方を、白と白のあれからして受けとっていた。自分の白はみんな死んでいた。相手の白が本当に活きていた。その相手の白のやり方でもって今度は猪之介に勝ったんでしょ。

ただ勝つ負けるとか、碁の名人とか、そういうことを私は言っているのではない。この人生の気合ですね、我々の実存の気合はそういうところにある。ということは要するに、自分を何ものともしない世界でしょうが。上から来るところの大きなものに、

「求めよ、さらば与えられん」

と。聖霊の事態を本当に求めなさい。そうしたらば、もはや聖霊は何ものとも替えることができないもの凄い内容を持っている。その人その人を通して、聖霊は自由自在にその賜物を顕し給う。これはパウロがコリント前書12章で言っている通りです。

しかも、それはさき程から申し上げている通り、十字架です。十字架を通って、十字架の贖いが、

「私はお前を全部引き受けた。お前はもう〔この十字架によって〕……」

と。パウロがなぜ、あんなに「十字架、十字架」と言うか。

「十字架の他に何も語るまじと思う」

と、パウロが言っているのはなぜかというと、

「自分は己を義としていた。自分を何ものかとして誇っていた。とんでもなかった。神に対する熱心はとんでもない熱心だった」

と。神における、キリストにおける熱心に変わった。熱心の角度が、上から臨んでくるものに変わったんです。

「エホバの熱心、これを成し給う」

という角度になってしまった。自分の熱心ではない。自分の信仰ではない。

親鸞の信仰もみんなそうです。あの一茶という俳人も、完全にいわゆる自力、他力なんていう相対的の世界を乗り越えたところの世界に入った。さっき一遍上人の話がありましたが、同じことです。

●無法の法

そういう事態が本当に限りなく。「無」という言葉が、へたすると躓きになりますけれども。さっき午前に、「無法」ということまで言ったでしょ。無法とか、無道とか。これはもの凄い世界だから、私はそう言うんです。法とか道にも、へたすると、こだわるからいかん。それは本当の無法の法、万法無法と言った。万法は即ち無法をもって表すという。

飛行機は飛ぶ軌道は一つもない。無軌道です。無軌道の世界を飛行機は歩く。歩いたあとの、今度は航跡もない。飛行機はどういう道を歩いたかわからない。それは成層圏を通れば、たまにはあの雲の筋が通るけれども、実際はわからんですよね、どう通ったかは。即ちそ

のような自由な世界が、聖霊の翼にのっかって飛ぶような世界です。それはしかしながら、本当の道を自ら開拓しながら、また自らその道を消しながら、進んで行く。

「こういう道でなければならん」

という道はない。無道なんだ。けれども、これは飛行機でいえば、風の法則に従うだけのはなし。我々の実存からいえば、キリストの霊法にのっかっていくはなし。

「霊法はかくの如きでござる」

という律法ではない。

将棋でも碁でも、何でも、達人となれば、みなそういうことになる。その時その時に不思議な手が現象してくるわけです。絵をかく人でも、彫刻をする人でも、学問をする人でも、台所で何かすることでも、何でもかんでも、みんなそうだ。

自由というのは、これが本当の自由なんだ。だから、一般に言われているような自由なんてものはひとつも自由ではない。それは勝手気儘というやつ。日本人は今だいたい勝手気儘主義だよ。まだいくらでも法則でも言わなければしょうがない世界なんだ。秩序だとか法則だとか言わなければならない。それからもうひとつ抜けるのは大変だよ、本当はね。けれども、真理は水を割らずに、キリストは語っておられる。

「聴く耳あるものは聴くべし」

と。お釈迦さんもそうだ。

「八万四千の法を説いたが、一つも説かなかった」

なんて言うんだから。なぜ、あんな不親切なことを言うかというと、

「自分でもって体験するまではどうにもならんよ。水はH_2Oであることがいくら判ったってダメだよ、飲まなければダメだよ」

というわけ。空気は見えない。見えないけれども、こうやって吸っているから、

「空気はある」

ということがはっきりしている。

この本因坊の話が示しているように、私たちは、この聖書の御言は、

「わが言は霊なり生命なり」

の世界ですから、言が意味ではない。そこにもう直ちに霊が、生命がくる。生命は愛ですよ、本当の生命の質は愛ですから。相手を生命づけるんですから。相手を助けることなんですから、救うことなんですから、「愛する」と言ったって。そういうこのキリストの福音というものはなんと――それだから、助けられると、人を助けたくなる。助けざればおられなくなる――「愛せよ」とか、善意とか、まだ解釈している世界ではないんです。

●180度の引っくり返し

そういうような事態を、次第次第に私たちは集会ごとにそうやって前進して行く。お互

いさま百花繚乱で、いろんな花があるから楽しいので、みんなが同じような花だったら、どうにもならない。私はこの集会にひとつもそういった類型的なものを望まない。みんな一人びとり顔が違うように、どうぞ、それぞれの在り方でいてください。

けれども、それが本当に御霊から発しているならば、お互いに助け合い、お互いに荷い合って行かざるを得ないはず。もし、それができなかったら、聖霊は本当に来ているとはいえないというだけのはなしです。

そういうことで、パウロの回心というものが、パウロを本当に根底から引っくり返して、180度の引っくり返しをしてしまった。ユダヤ人がこのパウロという素晴らしいチャンピオンを持ちながら、今もなおキリストを否み、パウロに躓いているとは、ユダヤ人とは躓きの民だね。そうでない人もいるでしょうけれども。

今日はまた、特にこの祈祷会には原始福音の方々もいらっしゃった。私は何のあれもない。みんな御霊にあっては全然、垣根がないですから。

今度は、今橋君の夏の集会に応援に行くよ、

「来てくれ」

と言うから。また、中村真一というちょっと変わった牧師さんがいる。何とか連合会とかいう。これもえらく私に来てくれというから、

「はい、はい、行きます」

と。どこへ行っても、聖名に在ってならば。私は、いわゆる党派の中には全然、党派根性がないからね、どこへだって行きますよ、聖名に在って聖名のためならば。そのかわり、いわゆるセクトのためだとか、いわゆる主義のためならお断りだ。

人間の世界では国境というものがあるね。自然には国境なんてありはしない。自然には境界線はありはしない。大自然は、地球はどこにも境界線なんか、地球それ自体は持たない。人間が勝手にいろんな境界線を作ってしまった。人間の世界というものはしょうがないね。出たり引っ込んだり。

だから、どうしても、午前の集会で申し上げた、この

「四大」

の境地、「地水火風」のそれになる。我々自身が、地となり水となり火となり風と成る。これはみんな神の創造の力、恵みの力。この地水火風をこの聖霊がそういうように例えられているんだから、聖霊が。キリストは遠慮なくおっしゃる。

「この水を、活ける水を飲め」

という。

「この火燃えたらんには何をか要せん」

と。そういうような、こだわりなく本当にそれを受けとっていくことが、どうして今のクリスチャンは何のかんのと言っているんでしょうね。もう問答無用なんだよ、正直ね。

●祈り

ただ独り、神さまの聖旨を全身に受け、旧約聖書のイザヤ書特に53章のエホバの僕の事態を、身をもって受けとり、自ら大祭司となり、自ら羔となり、ただ独り十字架にかけられ、一切の人たちに躓かれ、

「**わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし**」

と、天地を貫くところの神の義の実存の事態を告白され、けれども、

「**彼らを赦し給え**」

と、十字架の贖いをもって私たちの背きを完全に赦し、救いへと道を無条件に開き給いし主さま。

「私が血のバプテスマを受けたらば、お前たち祈って待っていろ、やがて聖霊が、約束の霊が来て、助主（たすけぬし）が来るから」

と言って、先を見ておられました。そして、この御霊がのちに、祈っていた群に風の如く火の如く臨んだ時に、そこに新しき歴史が始まりました。あなたの聖国がそこに立てられました。本当にこの聖霊によって神さま、キリストさまと一如の関係になるまではどうにもならん。そうなったならば、私たちは本当に神の国の証者として、いかにもして、隣人にこれを伝えずんばいられないことになってまいります。

このような聖霊の降臨を、私たちはまたこの聖霊降臨節を、その角度から本日朝よりただ今に至るまで受けとらしめられ感謝であります。聖霊が本当に私たちの生命の生命、光の光、愛の愛、力の力であることを、いよいよ感じてまいりました。もはや、何も言うことはありません。

「これ何ごとぞ」

と、全く驚嘆驚倒し、聖名を讃えるばかりであります。

私たちの側は何ものでもありません。これを無者と申します。それがゆえにあなたの無限無量者とされ、そして、あなたの無限無量が自在に一人びとりを通して、それぞれ現れ給うがゆえに感謝であります。

この兄弟姉妹たちを通して、その日常の為すいろいろな仕事、業にあなたのご栄光が現れることが私たちの歓びであります。どうぞ、この我々を通してあなたのご栄光がいよいよ現れてください。そうでなければ、日本にはもはや望みはありません。八方破れ、八方塞がりでありますが、天界から臨むところのこの驚くべき光、この福音の事態、いかにもして全聖書、私たちは活ける聖書となりたくあります。

かくして、もはや文字は文字にあらず。本当に神さま、うれしく存じます。

「**汝らはキリストの書（ふみ）なり**」

とパウロが言いました。本当に活きたこの書簡であります。

どうぞ、そのようにして、私たちはいよいよこの福音を証せずんばあらず。兄弟姉妹た

ちを通して、一人、二人、三人と隣人へ、この救いの道がいよいよ地道に展開して行くことができますように願い奉ります。

そこは必ず勝ちます。サタンの勢力には絶対に負けません。あなたが一切に、

「我既に世に勝てり」

と、サタンに勝ち給うたキリストさまであるからであります。

この地上においての生涯はもうたかが知れています。しかしながら、主さま、

「あなたの聖国を来らせ給え」

とは、実にあなたの聖国は現中の現、本当の真実の現実であります。その日を、先ほどの本因坊の夢以上な現実として、私たちはこれを見たくございます。

本当に、あなたの前に平伏しせしめられ、十字架を通してこの詩篇23篇の如き、

「緑の牧場、憩いの汀に伴い給う。もはや死の陰の谷を恐れず、汝の油わが首に注ぎ給う。我という杯は溢るるなり」

であります。このようにして、兄弟姉妹たちを通していよいよ、

「力より力へ、讃美より讃美へ、栄光より栄光へと、ついにキリストの姿に化するなり」

と、パウロは言いました。本当にそのようにして、何と申し上げていいかわかりません。かくのごとくこのペンテコステを迎え得たことをただ聖名のゆえに感謝いたします。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に、聖名により捧げ奉る。アーメン。

どうぞ、祈ってください。……〔兄弟姉妹の祈り省略〕……。

どうぞ、彼女の今までのあなたに対する一筋の信頼、あなたが御存知の通りです。どうぞ、いよいよあなたの御憐れみの力が深く彼女に加わり、日ならずして退院できますように願い奉ります。しかし、何より幸福なことはあなたと一つになっているその事態であります。彼女のまわりには天国が展開しております。聖名を讃え奉ります。

また、Kさんのお母さんが胆石のために入院しておられますが、どうぞ、その手術を、彼女の中に深くあなたが御霊をもって助け、これを無事に終わることができますように、御助けくださらんことを願い奉ります。また、美也子さんを通して、どうぞ、お母さんを助けてあげてください。あなたはそのために、またこの姉妹をあなたが捕まえられたことを信じます。どうぞ、

「全てのこと、信ずる者には相働きて善となる」

救いとなる、聖名の讃美となるということをいよいよ証していくことができますように願い奉ります。

その他、私の身辺にも気の毒な人がいますが、その小さな魂をあなたが顧みていらっしゃいます。その苦難が何ゆえであるか、どうぞ、深く御憐れみくださり、またこの事態を通して、お父さんやお母さんが本当にあなたを信ずるとはどのようなことであるかを、身をもって

味わっていくことができますように願い奉ります。

その他、ここにあるいろいろな方々のいろいろな悩みがあると存じますが、それらを通して、あなたの御力、あなたの栄光が現れんがためをつくづく思いますが、どうぞ、私たちのこの実存ならざる実存があなたの実存によって貫かれ、そして本当に何かしらんけれども不思議な御光が、御力が、御愛が現れて、あなたの御本願が成っていくことを信じて感謝いたします。

どうぞ、このようにして……（異言）……ああ、一切はキリストさま、あなたです。本当に、

「南無キリスト！」

と称えれば、即ち一切のことがそこに成っていくことを、根源現実を信じながら進んでまいります。

「天国はそこにあり」

と、主さま、キリストの言葉は、あなたの言葉はひとつも水が割られていません。

「汝ら、父の全きが如く全かれ」

と。「はい、然り」と、あなたの全さを戴いて進んで参ります。

ああ何と驚くべき御言なるかな。実に相対的な罪の現実をあなたは本当に天国現実に化して、化しつつ進んで行き給う。神の国は必ず成る。あなたの天国、新天新地は必ず来る。そのことをいよいよ私たちの生涯を通して、

「盛んなるかな、この希望！」

と、いよいよ希望より希望へと、現実に既に希望をいただいて進んで参ります。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれらと共に、心より聖名により捧げ奉る。アーメン。

聖歌623番「いつかは知らねど」を歌います。……